



アウシュビッツに消えた子どもたち

テレジン収容所の若い画家たち展



写真提供：野村路子

ドリス・ヴァイゼロヴァー 1944年10月4日12歳でアウシュビッツへ

2021年1月15日(金)～17日(日)

15日(金)・16日(土) 11:00～19:00

17日(日) 11:00～16:00

入場
無料

▶ 宮地楽器ホール 地下1F市民ギャラリー

JR中央線武蔵小金井駅中央口から南口徒歩1分

後援 小金井市 小金井市教育委員会 社会福祉法人小金井市社会福祉協議会
協力 「テレジンを語りつくす会」代表 野村路子 「テレジンを語りつくす会 府中」
主催 NPO法人ひ・ろ・こらぼ ☎042-304-8339



アリーチェ・シッティゴヴァー
1944年5月18日14歳でアウシュビッツへ



マリカ・フリードマノーヴァー
1944年10月4日12歳でアウシュビッツへ



ルース・ハイノヴァー
1944年10月23日10歳でアウシュビッツへ



1万5000人のアンネ・フランクがいた

第二次世界大戦の嵐が吹き荒れる中、チェコの北部に作られたテレジン収容所には、1万5000人の子どもたちがいました。皆、あのアンネ・フランクと同じように将来への夢や希望を持ちながら、ユダヤ人に生まれたという、ただそれだけの理由で、学校へ行くことも自由に遊ぶことも許されなかった子どもたちです。

収容所では、親から離され、僅かな食事しか与えられず、労働力としてしか生きる資格を認められていませんでした。そんな現状で、生きる希望さえ失っていた子どもたちに、もう一度笑顔を取り戻そうと命がけで立ち上がった大人たち…その一人フリードル・ディッカーは、「明日はきっと良い日がある。それを信じて絵を描きましょう」と子どもたちに語りかけました。

拾った紙切れに、小さくなったクレヨンや絵の具で、大好きな学校や遊園地を描く子どもたちには笑顔が戻りました。でも…生きて「良い明日」を迎えられたのは、たったの100人だけ。そして、4000枚の絵と数十編の詩が遺されていました。

そんな子どもたちの命のメッセージである絵からは、子どもたちの声が聞こえてきます。「学校へ行きたかった!」「野原を走りたかった!」「お腹いっぱい食べたかった!」…そして、「もっと生きていたかった!」と。

絵の前に立ってください。

子どもたちの声を聞いてください。

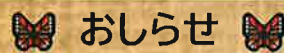
そして、親子で話し合ってください。今、学校へ行ける幸せ、真っ白な画用紙に絵を描ける幸せ、お腹いっぱい食べられる幸せを…

テレジンを語りつぐ会 代表 野村路子

フリードル・ディッカー(1898~1944)

「テレジン収容所の子どもたち」を語る上で重要な人物です。

ウィーンのユダヤ人家庭に生まれ、バウハウスに学びその類いまれな才能を総合芸術で発揮し、画家としても教育者としても認められた存在でした。収容される前に潜んだ納屋でも、ユダヤ人の子どもに絵を教え、収容所への呼出し状が来た日には、ありったけの画材をトランクに詰め、画家仲間からの救出の機会を断ってテレジンへ向かいました。そして、アウシュビッツに送られるまで「創造することは生きる力になる」「もう一度子どもたちの笑顔を取り戻したい」と命がけの表現の場「フリードルの絵の教室」は続きました。



お知らせ

「野村路子氏講演会」

2021年1月16日(土)

14時~16時

会場:府中市男女共同参画センター・フチュール(京王線中河原駅前)

※詳細は主催者「サークルいきいき」より追って告知されます。コロナ禍の開催につき変更の場合もあります。

私たちは当初2020年5月開催予定で「テレジン収容所の幼い画家たち展」の準備をしてきましたが、新型コロナウイルス感染拡大により中止・延期となりました。

「困難な時であるからこそ子どもたちの絵を観てほしい」、「子どもたちの笑顔のために命をかけた大人たちのことを知ってほしい」今、私たちは2021年1月に開催できることを信じて準備しています。ぜひ、ご来場ください。